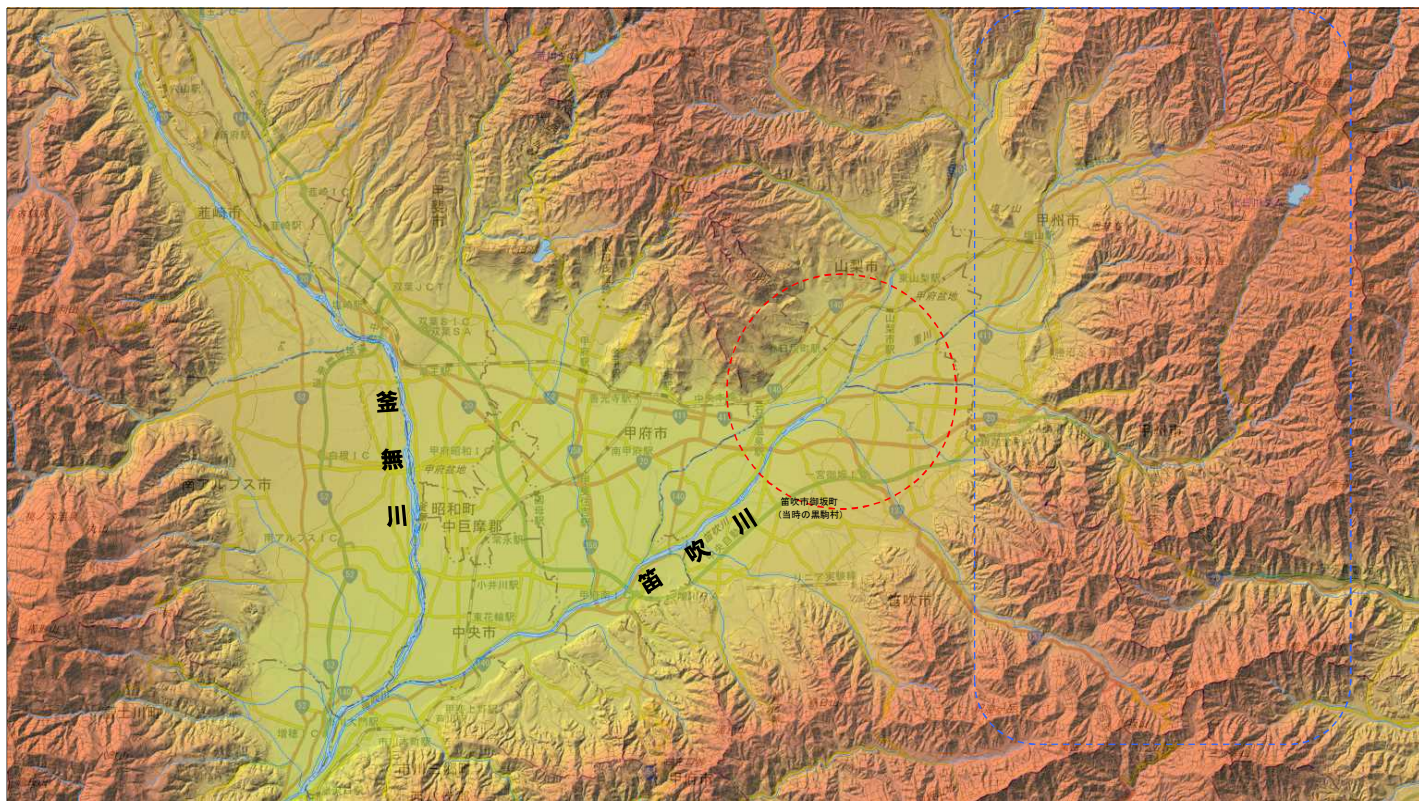


明治40年「甲府」の大水害1

山梨県では最大規模の水害

山梨県では、明治期頃から水害が繰り返し発生するようになりました。明治40年(1907年)の大水害は、8月22日から27日までの5日間大雨が降り続き、総降水量は甲府で315.4mm、大月で718mm、山中湖で643mm、南部で469.3mm、鵜沢で305mm、西山で52.2mm、韮崎で404mmまでに達しました。この大雨により、重川や日川、御手洗川、金川、笹子川の上流域では崩壊が多発し、家屋の全半壊や集落の孤立、耕地の流出や埋没、交通の寸断など甲府盆地東部の峡東地方中心に多大な被害を出しました。

死者：233人 流出家屋：12000戸 埋没や流出した宅地や田地：650ヘクタール
山崩れ：3353箇所 堤防の決壊・破損距離約：140キロメートル
道路の流出や埋没、破損距離約：500キロメートル 倒壊した電柱：393箇所



「甲府付近」地理院地図、標別標高図を重ねて表示

--- 川の氾濫が頻繁に起きる地域
--- 川の上流で崩壊が多発した地域

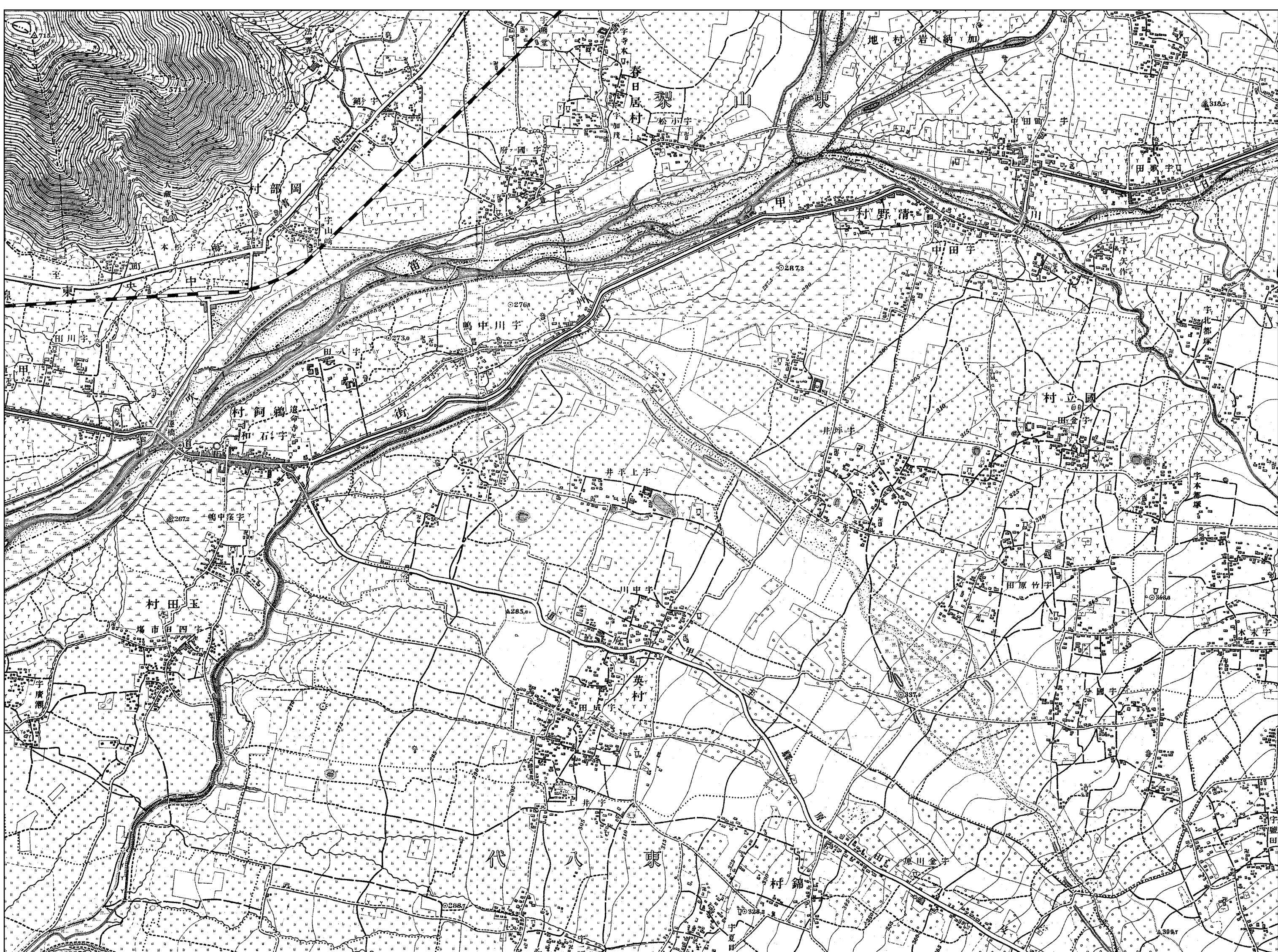
北海道への団体移住

水害発生直後から笛吹市御坂町(当時の黒駒村)においては、大水害のため生活の全てを失った村人が復旧が困難であることから、北海道への団体移住を希望する動きが起こりました。移住は明治41年(1908年)・明治42年(1909年)にかけて実施されましたが、更に明治43年(1910年)・明治44年(1911年)にも立て続けに水害が発生したため、5次に渡り移住が実施され、計650戸・3000人余りの人々が移住を果たしました。

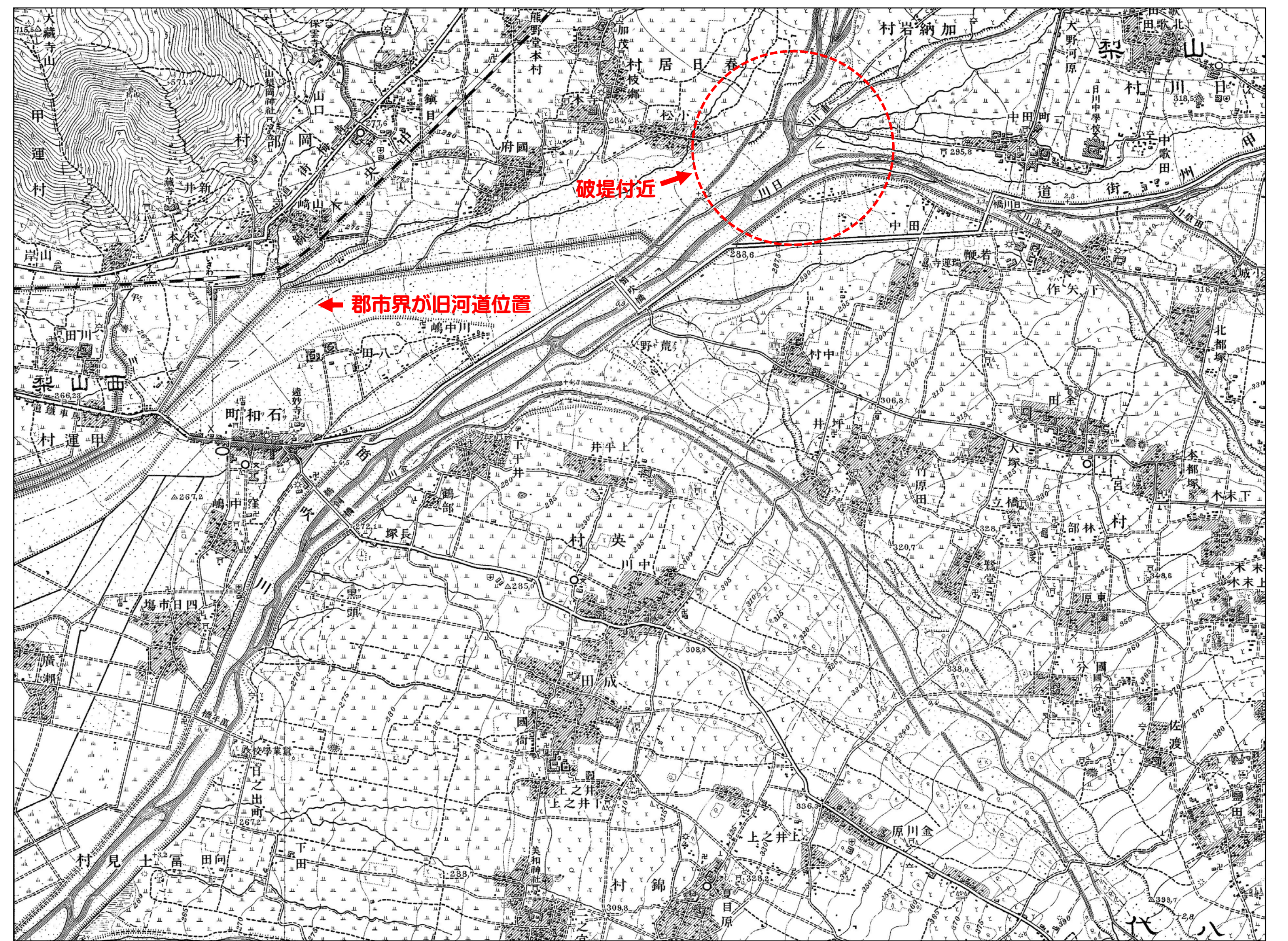
明治40年「甲府」の大水害2

流れを変えた笛吹川

甲府盆地は、古くから御勅使川、釜無川、そして笛吹川が運んでくる土砂によって作られた扇状地です。明治40年(1907年)の大水害では、甲府盆地のほぼ全域が泥の海と化し、堆積した土砂で笛吹川の流れが大きく変化しました。更に、明治44年(1911年)にも大洪水が繰り返され、約1キロにわたって笛吹川、重川、日川の合流点が決壊し、再び河川の流路が変わりました。また、それに伴い国道20号線(甲州街道)の通る位置も大きく変わりました。右下の明治44年修正にある郡市界線が旧河道位置になります。



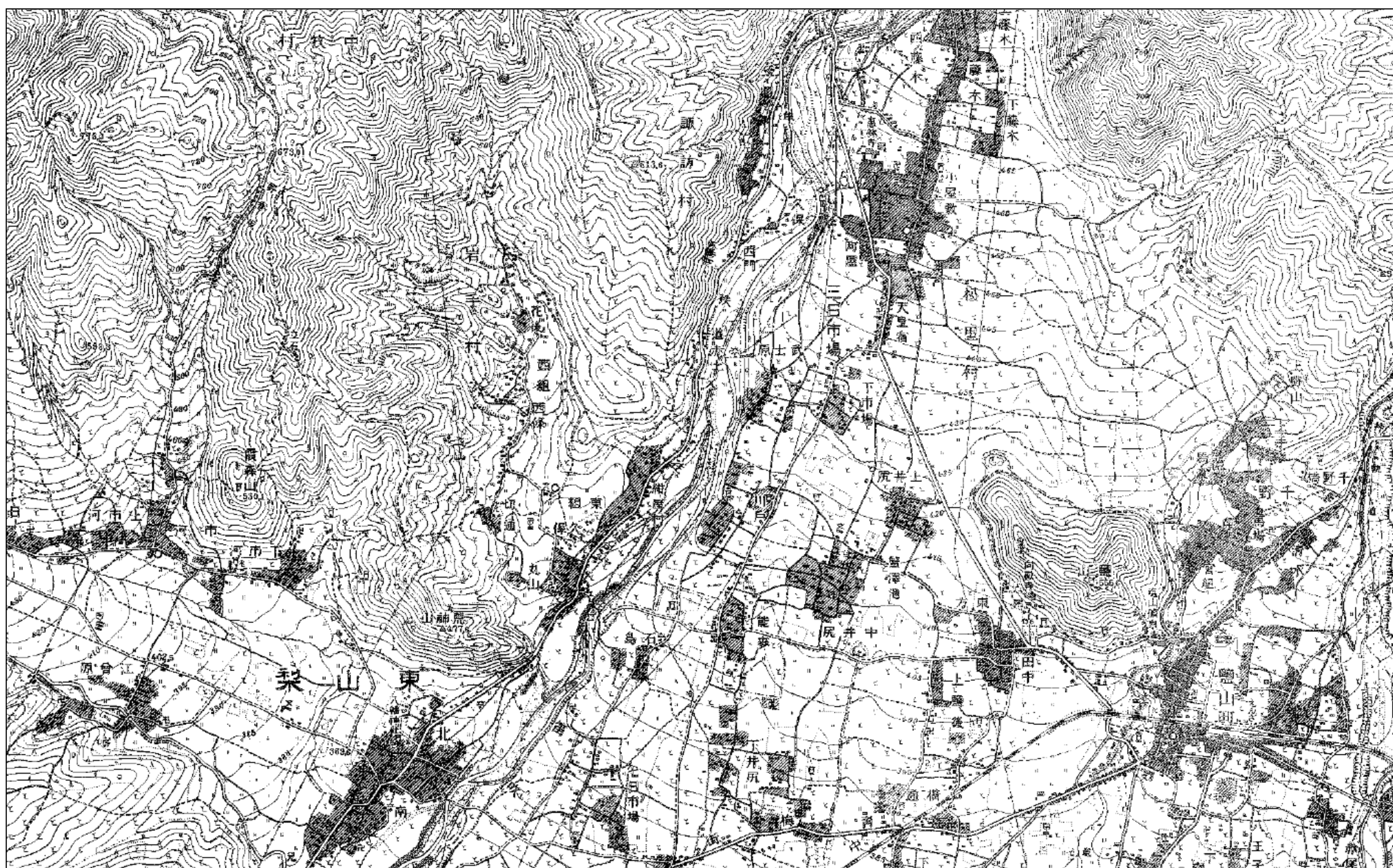
2万分1正式図「石和」明治21年測量、明治41年鉄補(一部拡大)



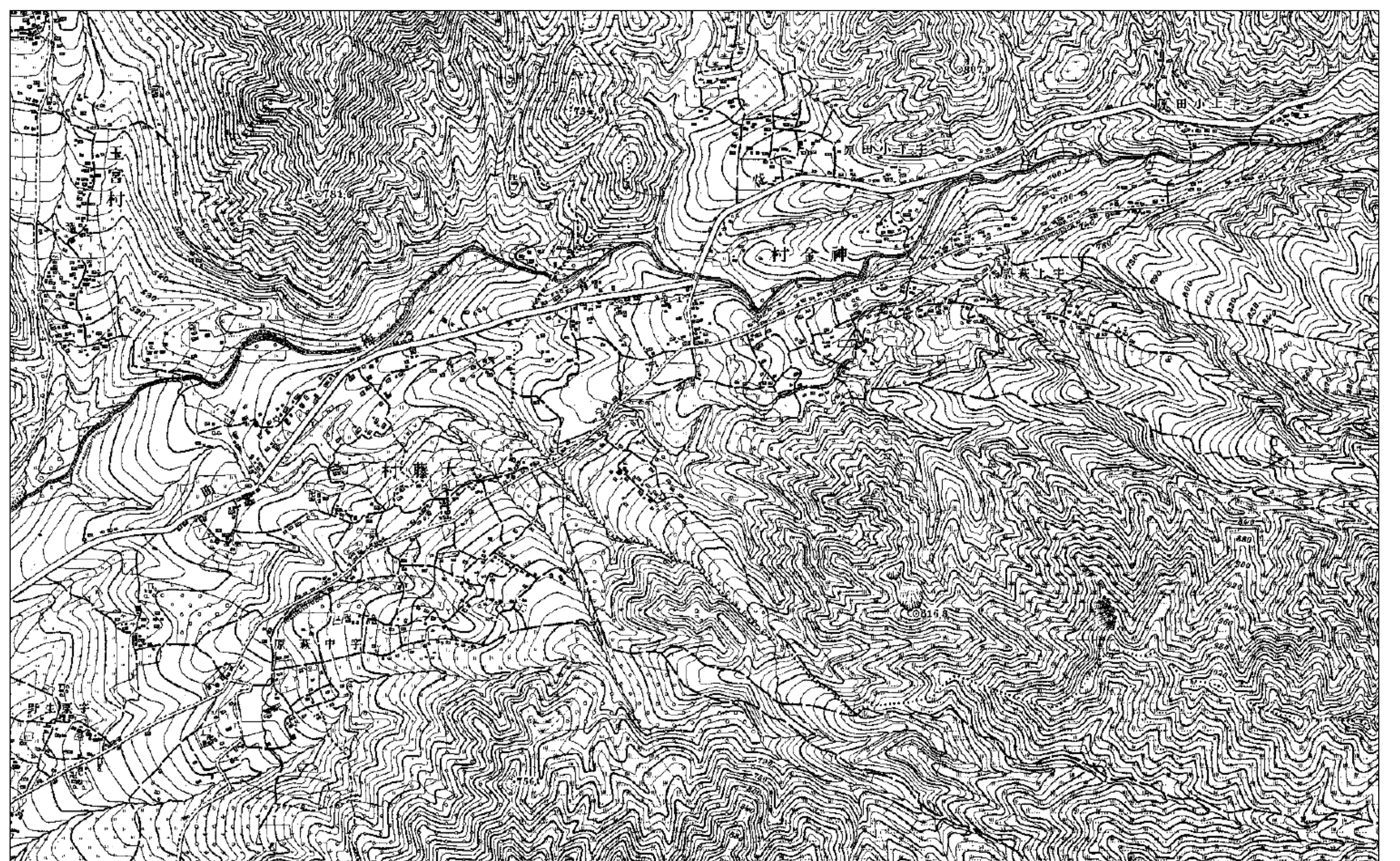
2. 5万分1地形図「石和」明治44年修正(一部拡大)

山林荒廃と広がる桑畑

もともと江戸時代には、山林を入会地として協同で大切に管理していました。しかし、江戸後期になると、笛吹川とその支流が流れる盆地東部の峡東地方では、養蚕業(ようさん)が盛んになり、桑畑の拡大と共に繭(まゆ)を煮る木材需要が高まりました。更に、明治期には、蒸気機関等の燃料に木材需要の拡大などが重なり、山林の保水力が著しく低下したのが、水害を引き起こした大きな原因であると考えられます。



山に広がる桑畑
2万分1正式図「山梨」明治21年測量(一部拡大)

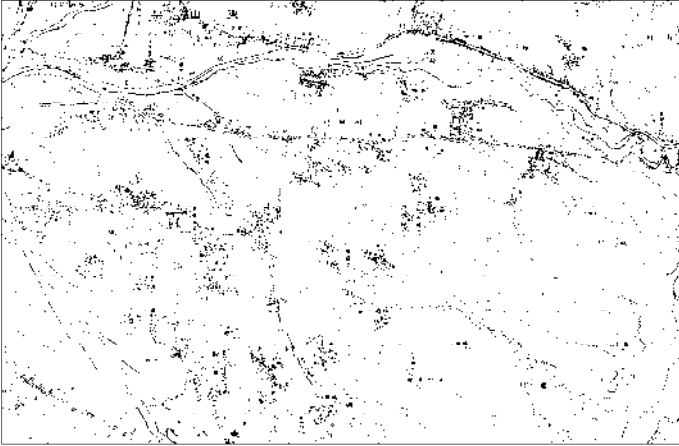


植生記号が消えた荒廃した斜面
2万分1正式図「七里村」明治41年測量(一部拡大)

明治40年「甲府」の大水害3

桑畑から果樹園へ

江戸時代中期から養蚕技術は全国各地で急速に発達し、明治時代には生糸が対外輸出品の上位を占めるようになりました。笛吹川とその支流が流れる甲府盆地東部の峡東地方でも養蚕業が盛んに行われ、明治44年修正の地図では、山の中腹から盆地全体に桑畑が拡大しました。しかし、平成18年更新の地図では桑畑は無くなり果樹園の記号に換わっています。



2.5万分1地形図「石和」明治44年修正（一部拡大）



2.5万分1地形図「石和」平成18年更新（一部拡大）

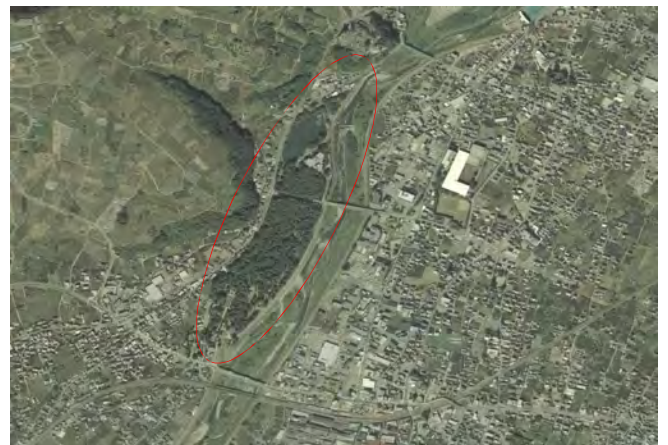
洪水から守る信玄堤・万力林

甲斐の国の領主・武田信玄は、いちはやく釜無川と御勅使川に注目し、約20年の歳月をかけて川をおさめる工事を行いました。また、笛吹川も大雨が降ると多くの支流河川の影響を受け水害が多発する地域のため、室町時代から明治時代にかけて釜無川では「御勅使川治水、信玄堤」、笛吹川では「万力林」に代表される大規模な治水工事が行われました。

現在でもその場所が残されていますが、明治16年(1883年)から御勅使川治水事業で施工された堰堤と護岸は、すべて空石積であったため現在は残されていません。現在ある堰堤は、大正15年(1926年)以降に造られた練積コンクリート式の堰堤です。



釜無川の「信玄堤」平成19年撮影



笛吹川の「万力林」平成19年撮影